

日々のみことば

2022年 10月

「私によく聞き従い 良いものを食べよ。
そうすれば、あなたがたの魂は豊かさを
楽しむだろう。」(イザヤ55章2節)



仙台南光沢教会

私たちの目指す教会

「キリストがあらわされる教会」

1. (礼拝) 『イエスは主』と告白する教会」

(ピリピ2:10、11)

私たちは、「ここに主がおられる」と信じて、御前にひれ伏す礼拝をささげます。

2. (宣教) 「キリストの香りを放つ教会」

(第2コリント2:15)

私たちは、遣わされた場所で、主と人に仕えて生きることを目指します。

3. (交わり) 「主を中心とした交わりに生きる教会」

(マタイ18:20)

私たちは、福音の喜びを互いに分かち合い、祈り合うことを大切にします。

*新しい会堂において、「私たちの目指す教会」が実現していくように祈りましょう。

こうして七つの時が過ぎて、ついにあなたは、いと高き者が人間の国を治めて、自分の意のままに、これを人に与えられることを知るに至るでしょう。(25)

ネブカデネザル王は再び夢を見ました。それによつて彼の心は恐れに囚われ、知者たちにその解き明かしを求めましたが、答えることのできる人はいませんでした。

そこで再びダニエルが呼び出されます。王から夢の内容を聞いたダニエルは顔を曇らせません。それはネブカデネザル王の高慢に対する神の審きを告げる夢だったからです。王は正常な精神を失い、人間の世界から離れ、牛のようになって野をさまようようになると宣告されました。この世の王として君臨するネブカデネザルが、「いと高き者が人間の国を治めて、自分の意のままに、これを人に与えられることを知るに至る」ためでした。主こそ真の支配者であることを彼は大きな痛みをもつて知らされるのです。主がこのようにネブカデネザルを裁かれたのは、彼に悔い改めを迫るためでした。高慢が砕かれ、主こそ真の王であり、自らはその前にひざまずくべき人間に過ぎないことを知る必要があつたのです。神の審きの後、正常な精神を回復したネブカデネザルは、主をほめたたえて告白しました。「そのみわざはことごとく真実で、その道は正しく、高ぶり歩む者を低くされる」(37)と。

わたしたちの人生においても、主はあえて痛みをお与えになることがあります。わたしたちを苦しめるためでなく、悔い改めて主の御前にひざまずくことを願つておられるのです。

神から与えられた知恵

王が求められる秘密は、知者、法術士、博士、占い師など、これを王に示すことはできません。しかし秘密をあらわすひとりの神が天におられます。(27、28)

バビロン王ネブカデネザルは自分が見た夢に思い悩み、国中の知者たちに命じてその夢を解き明かすように命じます。自分が見た夢の内容を伝えずに、「その意味を解き明かせ。さもなければ知者は皆殺しだ」といういかにも大帝国の暴君らしい命令でした。

王の要求に誰も答えられず、知者たちが殺されようとしていたとき、ダニエルは「わたしが信じている神ならできると申し出ます。三人の友人と共に、神の憐れみを祈り求めました。すると主は、王が見た夢の内容とその意味をダニエルに教えてくださいました。ネブカデネザル王の前に立ったダニエルは、これから解き明かす知恵がどこから来るものかを明らかにします。「しかし秘密をあらわすひとりの神が天におられます」と。自分自身に知恵があるのではなく、その知恵は自分が信じる神から与えられたものであるというのです。知恵のある多くの者たちは、しばしばその知恵のゆえに自らを誇ります。けれどもダニエルは自分を誇るのではなく、知恵を授けてくださった主なる神をほめたたえたのです(20)。

わたしたちもダニエルのように、必要な知恵を天の神に求めようではありませんか。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」(ヤコブ15)。

知られている我

詩篇139篇1〜6節

主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知りつくされました。(1)

本篇は、生ける神との人格的な関係について語る最高傑作の一つです。「あなた」「わたし」という表現が繰り返されるように、詩人と神との距離の近さ、親密さが特徴です。

6節までは、神が詩人の全てを知り尽くしておられる、すなわち神の全知について語られています。「主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知りつくされました」。それは目に見えぬ行動だけではありません。神は詩人の心の中の思いまで知っておられます。罪を持つ人間にとり、全てを知られてしまうことは恐ろしいことです。人はそれぞれ隠したい部分を持ち、他の人には知られたくない過去があったりするからです。そのため人前では本当の自分を隠そうとします。他の人々から拒絶されることを恐れるのです。そして人は神の前でも自分を良く見せようと装います。「こんなダメなわたしでは、神も受け入れてくださらないに違いない」と考えるからです。けれどもこの詩人は、神は弱さや醜さを持つたこのわたしの全てを知った上で受け入れてくださるということです。詩人はそこに大きな喜びと平安を見出します。もはや神の前で自分を良く見せようと取り繕う必要はないからです。

わたしたちも全てを知っておられる神にありのままを差し出そうではありませんか。主の前に自らをさらけ出すことは恐ろしいことではなく、大きな平安を与えてくれるのです。

たといそうでなくても

ダニエル書3章

たといそうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拝みません。(18)

ネブカデネザル王は自分の建てた金の像を拝むように国民に命じました。そして、もし拝まなければ、火の燃える炉の中に投げ込まれる脅迫しました。

人々が圧倒的な権力者の命じるままに拝む中、ダニエルの三人の友人は断固としてこれを拒否しました。このことを伝え聞いた王は激しく怒り、三人を呼び寄せ、自分の前に心を変えて金の像を拝むか、さもなければ燃える炉の中に投げ込まれるか、どちらかを決めるように迫りました。このときに三人の青年が口にした言葉が今日の聖句です。もし燃える炉の中に投げ込まれても、彼らの仕えている神が救い出してくださるに違いないとの信仰を告白します。それだけでなく、「たといそうでなくても」と言葉を続けて、もし仮に神が助け出してくださらなくても、偶像を拝むことは決してしないと言い放ったのです。ここに、自分の生と死の一切を神の手に委ねきついている信仰者の姿、いかなる圧力にも屈しない真つ直ぐな信仰が表されています。そして主は、命がけでご自分に寄り頼んだ若者たちを決して捨てることなく、燃える火の中から救い出してくださいました。

サタンがキリスト者に対して巧妙な手口で様々な妥協を求めてくるこの時代にあつて、この若者たちのような主に対する真つ直ぐな信仰を持ちたいものです。

歴史を支配する神

ダニエル書8章

彼は悪知恵をもって、偽りをその手におこない遂げ、……また君の君たる者に敵するでしょう。しかし、ついに彼は人手によらずに滅ぼされるでしょう。(25)

この章の幻は、バビロンの王ベルシャザルの治世第三年、バビロンがまだ強力な力を誇っている頃のこと、これから起ころうとしている国々の興亡を預言したものでした。

二本の角を持つ雄羊はメディアとペルシャの王を表し、次に登場する雄やぎはギリシャの王を表します。その角が折れて四つの角が現れますが、それらはギリシャ王アレクサンダー大王の死後に国が四つに分割されたことを意味していると言われます。さらにその国の終わりの頃にはひとりの王が登場し、恐ろしい破壊を行い、有力者たちや神の聖徒たちを滅ぼすと予告されます。この王は紀元前二世紀に登場し、エルサレムを攻め、ユダヤ教を絶滅しようとしたシリアのアンティオコスエピファネスを指していると言われます。このように強力な王たちが次々と登場し、世界を我がものとして治めますが、この預言の最後には、「しかし、ついに彼は人手によらずに滅ぼされるでしょう」と告げられます。ダニエル書が訴えようとしていることは、たとえどのような王たちが登場しようとも、世界の歴史は全て神のご支配の中にあることを力強く語っているのです。

真の神を信じるキリスト者は、世の人々には見えないものを見ていく者たちです。すなわち、この世界はわたしたちの主が支配しておられると信じて生きるのです。

神を畏れない者の最後

ダニエル書5章

その事の解き明かしはこうです、メネは神があなたの治世を数えて、これをその終りに至らせたことをいうのです。(26)

ネブカデネザルが王を退いた後、何代か王が続き、やがてバビロニア帝国最後の王ベルシヤザルの時代となりました。彼はバビロンの繁栄のゆえに高ぶっていました。

ある日宮殿で大宴会を催していたとき、王はエルサレムの神殿から奪い取ってきた聖具を持って来させ、その金銀の器で酒を飲んでいました。すると突然、人間の手の指が現れ、宮殿の壁に不思議な文字を書きました。これを見た王は恐ろしさのあまりに震え、文字を解読する知者を求めました。この王の求めにより、ダニエルが再び呼び出されました。ダニエルは神の審きを語るその文字を解き明かしました。すなわち、王の治世は終わりとなり、国家は他の国々に分割されるというものでした。自分たちの絶大な権力を誇り、繁栄の上に安住して真の神を畏れることをしなかつたベルシャザル王の治世は、神によつて終わりを告げられたのです。彼が無視して捨て去つた神によつて、彼は捨てられることになったのです。ダニエルが解き明かしたその夜、王は殺され、バビロニア帝国は滅亡しました。

物事が順調に進んでいるときにこそ、わたしたちは真の神を畏れ敬い、自らを低くすべきです。自分の力によつて今の良い立場を得たのではなく、天の神の恵みと憐れみのゆえに全てのものを与えられたのですから。

日々の祈りによる力

ダニエル書6章

ダニエルは、その文書の署名されたことを知って家に帰り、……以前からおこなっていたように、一日に三度ずつ、ひざをかがめて神の前に祈り、かつ感謝した。(10)

新しい王ダリヨスは、全国に百二十人の総督を立て、さらにその上に三人の総監を立てました。ダリヨス王の寵愛を受けていたダニエルは、総監の一人に任命されました。

他の側近たちはダニエルをねたみ、ダニエルを失脚させる計画を立てました。これから三十日間、ダリヨス王以外のものを拜んではならないという禁令を王に提案し、受け入れられました。総監たちの陰謀を知ったダニエルはあわてふためくことなく、「以前からおこなっていたように、一日に三度ずつ、ひざをかがめて神の前に祈り、かつ感謝した」といいます。この危急のときにも、「いつものように」(新改訳)、真の神を礼拝したのです。このことが王に知られ、禁令通りダニエルは獅子の穴に投げ入れられますが、神はダニエルを獅子の口から守つてくださり、ダニエルは傷一つ負うことなく助け出されました。獅子の口から守られたこと以上に驚くべきことは、真の神への礼拝が禁じられたときにも、これまでと変わることなく主を礼拝し続けたダニエルの信仰です。普段の生活の中で、いつものように神に祈り、神に礼拝をささげ続けることが、いざというときに大きな力を与えるのです。

わたしたちの祈りや礼拝が、何か支障があるとすぐにやめてしまうようなものではなく、どんなときにも変わらさず、いつものようにささげられるようにと願います。

人の子の出現

ダニエル書7章

わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。(13)

ダニエル書は前半部分でバビロンの王ネブカデネザルからメディアの王ダリヨスまでの歴史を記してきましたが、この七章からはダニエルが見た幻が記されています。

この章の幻はバビロン最後の王ベルシャザルの時代に見た幻です。ダニエルは夢の中で海から上がってきた四頭の大きな獣を見ました。この四頭の獣は、バビロン、メド・ペルシャ、ギリシャ、ローマと、それから後に起こるであろう国々の興亡を表していると言われます。獣のように世界中を食い荒らす国々が興っては消えていく中で、それら人間の傍若無人な支配に終止符を打つのは、やがて来たりたもうキリストであることが13節で告げられています。これはキリストの再臨による神の主権の確立を表しています。主イエスご自身も、世の終わりについて語られた中で、「そのとき、大いなる力と栄光とをもつて、人の子が雲に乗つて来るのを、人々は見るとであろう」(マルコ一三26)と告げられました。キリストの出現によつて、神を恐れぬ人間たちによる支配は終わりを告げ、神による永遠の支配が成就します。ダニエルは混乱する世界情勢の中で、遠くに神の絶対主権を見ていたのです。

この世の王になろうとする者たちが激しく争い合う世界を見つめながら、真の支配者は主なるキリストであることをわたしたちはしっかりと心に刻んでいたいものです。

迫害に抵抗する信仰者たち

ダニエル書11章

彼は契約を破る者どもを、巧言をもってそそのかし、そむかせるが、自分の神を知る民は、堅く立つて事を行います。(32)

ダニエルが見せられた幻が続いています。ペルシヤ帝国以降の国々の興亡、ユダヤ教に対する迫害、反キリストの出現などが記されています。

その中で、ユダヤ教に対して激しく迫害を加え、反キリストの型として登場するシリヤの王安ティオコス・エピファネスについて詳しく書かれています。彼は二度にわたるエジプト遠征の帰途、エルサレムに立ち寄り、神殿を汚し、多くの民衆を殺します。そしてギリシヤの宗教に改宗しなければ死を与えると人々を脅迫したのです。このとき、民衆の反応は二つに分かれました。エピファネスの誘いにつて主に對する信仰を捨てる者たちと、激しい迫害にもかかわらず命をかけて信仰を守り通した者たちでした。エピファネスの甘い言葉に唆されたのは、もともと主の律法を破っていた者たちでした。普段から神の言葉を軽んじていた者たちは、いざというときにあつさり信仰を捨ててしまったのです。これに対して、「この方こそ世界を治める真の神である」と信じる者たちは、主への信仰を捨てず、死をも恐れずに信仰を守り通しました。大きな困難にあつても、信仰が彼ら自身を支えたのです。

迫害に遭ったときにどう対処するかではなく、今ここで、主に對する確かな信仰を築いていきたいものです。平時の信仰が非常時のわたしたちを支えるからです。

主の臨在による平安

詩篇139篇7、12節

わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます。(8)

7節から12節の部分で、詩人は神の遍在について語ります。すなわち、神は特定の場所に制限されることなくどこにでもおられる方であるということです。

神の遍在と聞くと、世界のありとあらゆるものを神としてしまう汎神論を混同しそうになります。聖書の神は、被造物とは明確に一線を画した絶対他者としておられます。その神の遍在を語るのに、詩人は自分との関わりの中でそのことを語ります。「わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます」。自分がどこへ行こうとしても、神の前から離れることは決してできないと述べます。人間の愚かさは、この神から逃げだそうとすることです。けれども主は、どこまでもわたしたちを追いかけ行かれます。詩人はそのことを嫌がっているではありません。かえってそこに大きな慰めと平安を見出します。わたしたちが神に見捨てられたかのように感じる時も、そこにも主はおられる！と詩人は語ります。この約束を信じる者たちは、たとえどのような状況に置かれたとしても絶望することはありません。

皆さんは今、どのようなところに置かれているでしょうか。「ここにも主がおられる」と信じて平安を得ようではありませんか。

共同体の罪の悔い改め

ダニエル書9章

主よ、恥はわれわれのもの、われわれの王たち、君たちおよび先祖たちのものです。これはわれわれがあなたにむかつて罪を犯したからです。(8)

この章の前半には、ダニエルがイスラエルの民のために主にささげた執り成しの祈りが記されています。ダニエルは祖国の回復を心から願い、熱き祈りをささげました。

ここでダニエルはまず、イスラエルの民が今のような捕囚の身になっているのは自分たちの罪が原因であることを素直に認め、悔い改めの祈りをささげます。このとき、ダニエルは先祖たちが犯した罪を「あの人々は……」と他人事のようにして祈ったのではなく、「われわれは……」と述べて、自分の罪として告白しています。神の民イスラエルという同じ共同体に属する者として、先祖たちの罪は自分たちの責任でもあるということです。これが一つの共同体に属する者のあるべき姿です。わたしたちの教団においても、一九九七年の教団総会において、「日本ホーリネス教団の戦争責任に関する私たちの告白」を表明しました。これは戦時中の指導者たちの過ちを今の世代が告発するというものではありません。教団が犯した罪を自分たちの責任として受け止め、神と人との前で悔い改めをささげたのです。共同体の祝福は、真摯な悔い改めを抜きにはありえないと信じたからです。

教会に連なるということは、教会の祝福も罪も、自分のこととして受け止めるということです。そのような者たちの祈りによつて、教会は形成されていくのです。

祈りにおける霊の戦い

ダニエル書10章

あなたが悟ろうと心をこめ、あなたの神の前に身を悩ましたその初めの日から、あなたの言葉は、すでに聞かれたので、わたしは、あなたの言葉のゆえにきたのです。(12)

ダニエルの祈りは聞かれ、ペルシヤ王クロスによつてイスラエルの民は捕囚から帰って行きました。ダニエルはそのままペルシヤに残り、民の帰還から二年後に一つの幻を見ました

ダニエルはイスラエルの民のために三週間断食をして祈っていました。そのとき、主が幻のうちに見え、これから起こることを告げます。その中で神の使いは、「あなたの神の前に身を悩ましたその初めの日から、あなたの言葉は、すでに聞かれた」と告げます。三週間前にダニエルが祈り始めたその日に、彼の祈りはすでに聞かれていたということです。神の使いはダニエルの祈りを受けて、ダニエルに神の言葉を告げるために神のもとを出て来たのですが、彼のもとに着いたのは二十一日後、すなわちちょうど三週間後のことでした。このように時間がかかったのは、ペルシヤやギリシヤを通してこの世界を支配しようとする悪の霊と激しく戦っていたからでした。ダニエルの三週間にわたる断食祈禱は、天上における霊の戦いの勝敗と結びついていたのです。

わたしたちは祈りがすぐに聞かれないからといって祈ることをやめてはなりません。わたしたちに必要なのは、悪の霊との戦いに参与することです(エペソ六12)。わたしたちの信仰を奪い去ろうと働く悪しき霊に対して、祈りをもつて対抗しようではありませんか。

命を支えておられる神

詩篇 139 篇 13 ～ 24 節

あなたはわが内臓をつくり、わが母の胎内でわたしを組み立てられました。(13)

詩人が神と自分との関わりがどこから始まったのかを思い巡らしたとき、母の胎内にまど遊りました。すでにあの時から、神と自分との関係が始まっていた、と驚きました。

天地を創造された壮大な神が、この小さなわたしをも造られたと詩人は語ります。「あなたはわが内臓をつくり、わが母の胎内でわたしを組み立てられました」。どんな人も神によって命が与えられたのです。ここに命の尊厳があります。ところが人間は自分たちでこの命の尊厳を失っています。「できちゃった」などと言うことによって、我が子を生まれて来なくても良かった存在であるかのように表現します。しかし、真実はそうではありません。どんな人も、この世に生まれて来なくて良かった人などいないのです。神が「生きよ」と言われたからこそ命が与えられたのです。母の胎内に命が与えられた時から、神はずっとわたしたちを支え続けておられます。このことが分かるとき、人生の意味が変わります。わたしたちはたまたま生まれたのではなく、神が確かな意図をもって命を与えられたことを知るからです。このわたしの人生にも意味があり、そこに命を与えられた神の目的があると。

今日も、わたしたちに命を与え、このところまで生きることを許してください。御前に心からの礼拝をささげようではありませんか。

最後の時

ダニエル書 12 章

国が始まつてから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます。(1)

ここには世の終わりに関する預言が記されています。その内容はヨハネ黙示録に記されている事柄と重なり合っています。

これらの預言を理解しようとするとき、あくまで幻という形で示されたものであることを弁える必要があります。聖書が詳しく語っていないことについて、人間の限りある知恵で詮索することは信仰を歪めてしまう恐れがあります。その一方でハッキリしていることがあります。それは、終わりの日に、神を信じる者たち、すなわち命の書に名を記されている者たちは、永遠の命に生きるために蘇るといことです。「しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます」。神を信じる者たちにとって、世の終わりは得体の知れない恐ろしい時というのではなく、救いが完成するときです。大きな患難がこの世界を襲うとき、わたしたちは救いにあずかるのです。聖書は繰り返しその約束を私たちに語り、それゆえ地上の生涯を希望をもって生きるようにと勧めるのです。

世の終わりに関する数字の意味や細かい記述に心を奪われてはなりません。それらはいくまで象徴的な表現であつて、具体的な何かを指し示すものではないからです。理解を超えたことは主の御手にゆだね、地上の生涯をまっすぐに歩みたいものです。

預言者の苦しみと神の愛

ホセア書1章

行って、淫行の妻と、淫行によって生れた子らを受けいれよ。この国は主にそむいて、はなはだしい淫行をなしているからである。(2)

預言者ホセアが活動した時代はイザヤの時代と重なります。イザヤが南王国ユダにおいて活動していたのに対して、ホセアは北王国イスラエルにて活動しました。

それはヨアシの子ヤラベアムの治世で、イスラエル王国が非常に繁栄した時代でした。その一方で、物質的な繁栄は道徳的・宗教的な墮落をもたらしました。民らはバアル礼拝に傾き、恥ずべき淫乱な偶像礼拝に陥りました。そのような中、ホセアは主に命じられます。「行って、淫行の妻と、淫行によって生れた子らを受けいれよ」。神殿で娼婦として働くゴメルを妻として迎えるようにというのです。これは神と契約の民イスラエルとの関係を表すものでした。主の花嫁であるはずのイスラエルは主を捨ててバアル神のもとに走り、淫行にふけていたというのです。ホセアは自らがそのような妻を迎え入れることにより、主がイスラエルの罪に対してどれほど心を痛めておられるかを身をもつて知ることになりました。主の悩みと苦しみは、イスラエルに対する変わることを愛から生まれるものだったのです。

主の真実な愛は、このわたしたちに対しても注がれています。わたしたちが主の民とされていながら神ならぬ存在に心を寄せるとき、主は激しくその心を痛めておられます。そして「わたしのもとに帰ってきなさい」と熱心に呼びかけておられるのです。

滅びの谷を望みの門に

ホセア書2章

その所でわたしは彼女にそのぶどう畑を与え、アコルの谷を望みの門として与える。その所で彼女は若かつた日のように、エジプトの国からのぼつて来た時のように、答えるであろう。(15)

主の命令によってホセアが妻として迎えた淫婦ゴメルは、淫行をやめることができず、恋人たちを慕つて夫ホセアのもとを出て行きます。

この姿は、エジプトを出たイスラエルの民が荒野において神の民とされたにもかかわらず、カナンの地に入ると主を捨ててバアル礼拝に傾いて行ったことを表しています。もはや弁解の余地など全くないゴメルですが、彼女は恋人たちが自分に寄りつかなくなると、一転して夫ホセアのもとに帰ってきました。ホセアの苦しみはどれほどだったでしょうか。しかしそのとき、ホセアは主の声を聞いたのです。「アコルの谷を望みの門として与える」と。アコルの谷とは、イスラエルが約束の地に入つて行ったとき、神の命令に背いたアカン一族が滅ぼされた谷の名前です(ヨシヤ七章)。あの滅びの谷アコルを希望の門に変えてくださると主は言われるのです。滅ぼされても仕方のない者たちをなほも憐れみ、神の民として何とか生かそうとされる主の熱烈な思いがほとばしり出ています。罪人たちが滅ぼされることなく救い出される唯一の望みは、主の変わることにない真実な愛にあるのです。

幾たびも主のもとを離れてしまうわたしたちですが、向きを変えて立ち帰るとき、主は喜んで迎えてくださいます。これほどまでの主の愛に、頭を垂れるばかりです。

主に帰ろう

ホセア書6章

さあ、わたしたちは主に帰ろう。主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし、わたしたちを打たれたが、また包んでくださるからだ。(1)

前の章でイスラエルの悔い改めはもはや不可能であることが語られました。この章に入ると、悔い改めへの招きが語られます。突然、回復の恵みが告げられたのです。

預言者ホセアは罪に陥った民に呼びかけます。「さあ、わたしたちは主に帰ろう」と。徹底的に神に背いた民がなおも主のもとに帰ることができるのは、「主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし、わたしたちを打たれたが、また包んでくださるから」です。手術をする医者にはナイフをもつて傷つけますが、決してそのままにはしておかず、最後にはその傷口を包みます。ナイフを振るうのはあくまで病人を癒すためだからです。わたしたちが悔い改めに躊躇するのは、主がいかに憐れみ深いお方であるかを十分に知っていないからでしょう。ホセアは民に勧めます。「わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ることが求めよう」(3)と。たとえわたしたちの罪がどんなに深くとも、わたしたちの主はそれらの罪を覆ってくださる憐れみ深い方であることを知るとき、勇氣と信頼をもって主のもとに帰っていくことができるのです。主に帰ることは、主を正しく知ることから生まれます。

それゆえわたしたちは、もつと深く主を知ろうではありませんか。ホセアの勧めに従い、主がいかなるお方であるかを知ることが切に求めようではありませんか。

愛による贖い

ホセア書3章

あなたは再び行つて、イスラエルの人々が他の神々に転じて、干ぶどうの菓子を受するにもかかわらず、主がこれを受せられるように、姦淫に愛せられる女、姦淫を行う女を受せよ。(1)

主の命令に従つてホセアはゴメルを妻として迎え入れましたが、ゴメルはホセアの愛をなかがしるに、再び情夫たちのもとに走り、ついには娼婦にまで落ちぶれてしまいました。

主は再びホセアに告げられました。「あなたは再び行つて、……姦淫に愛せられる女、姦淫を行う女を受せよ」。ホセアの真実な愛を裏切つたゴメルをなおも愛するようになる命令です。ホセアは主の言葉に従い、銀十五シケルと大麦一ホメル半を払つて彼女を買い戻しました。ホセアは罪の責任を彼女に負わせず、自ら代わりにそれを引き受けたのです。そしてそのゴメルに向かつて語りました。「あなたは長くわたしの所にとどまつて、淫行をなさず、また他の人のものとなつてはならない。わたしもまた、あなたにそうしよう」(3)。捨て去られて当然の不貞の妻に対して、その不義を責めることなく、愛のうちに留まるようにと諭すのです。何という愛でしょう。これこそ、主イエスがわたしたちに示してくださいました神の愛です。わたしたちの神は、御子キリストの命というかけがえのない代価を払つて罪の奴隷となつていたわたしたちを買い戻し、「わたしの愛の内になさい」と語ってくださいなのです。

この深い主の愛に対して、わたしたちはどうお応えするでしょうか。命をかけたキリストの愛に対して、わたしたちも精一杯の真実をもってお応えしようではありませんか。

神の律法を捨てた民

ホセア書4章

あなたは知識を捨てたゆえに、わたしもあなたを捨てて、わたしの祭司としない。あなたはあなたの神の律法を忘れたゆえに、わたしもまたあなたの子らを忘れる。(6)

この章からは、ゴメルの話から離れて、イスラエルに対する主の言葉が記されています。神の真実に背き、偶像礼拝に陥ったイスラエルに対して神の裁きが臨むことが告げられます。主なる神がイスラエルに対して裁きをくだされるのは、彼らが神を捨てたからです。「わたしの民は知識がないために滅ぼされる」(6)。ここで言われる「知識」とは、この世の知識ではなく、神の言葉を通して与えられる神についての知識です。神の民でありながら、彼らは神を知ろうとしないのです。そればかりか、彼らは心の中から律法の言葉を消していき、また。「あなたはあなたの神の律法を忘れたゆえに……」。人の心の中から神の言葉が消えていくとき、神の存在そのものがその人のうちから消えていきます。神のことなどどうでもよくなり、自分の思うままに生きるようになるのです。ここには神の言葉を捨てた神の民がどのような状態に陥ったかが語られています。「ただのろいと、偽りと、人殺しと、盗みと、姦淫することのみで、人々は皆荒れ狂い、殺害に殺害が続いている」(2)。神の言葉を捨てて神の存在を消し去るとき、人はもはや人ではなく、獣になってしまふのです。わたしたちは神の言葉を捨ててはなりません。聖書の言葉に耳を傾け続けることを通して、わたしたちは主のご臨在を心の内に形づくっていくことになるのです。

悪しき霊による背信

ホセア書5章

彼らのおこないは彼らを神に帰らせない。それは淫行の霊が彼らのうちにあつて、主を知ることができないからだ。(4)

ここにはイスラエルの罪に対する神の怒りと裁きが記されています。その裁きとは、神を知ることを拒んで罪に陥っていること自体がすでに神の裁きであるということです。

イスラエルにとって恐ろしいことは、悔い改めの可能性が取り去られることです。聖書において、悔い改めは「神に帰る」こととして表現されますが、ここでは「彼らのおこないは彼らを神に帰らせない」と言われています。神に帰ることを不可能にしているのは、淫行の霊が彼らの内にあるからです。ここでいう淫行とは、主を離れてバアル神を礼拝することです。そのバアルの神殿には神殿娼婦があり、礼拝者たちはそこで姦淫の罪にふけていました。そのような意味において、彼らの淫行は宗教的・肉体的な二重のものとなりました。その淫行の霊が彼らのうちから取り去られない限り、預言者がどんなに熱心に神のことを語っても、彼らは主を知ることができないと断言されています。主を知るとは、知識において神がどのような方であるかを知ることではありません。生命的な関係において、「この方こそわたしの主」と告白するに至ることです。

神の言葉に耳を傾ける前に、まずわたしたちの内から神以外のものに心を寄せようとする霊を取り除かなければなりません。命の関係において主を知るために必要なのです。

愚か者とされる預言者

ホセア書9章

刑罰の日は来た。報いの日は来た。イスラエルはこれを知る。預言者は愚かな者、霊に感
じた人は狂った者だ。これはあなたがたの不義が多く、恨みが大きいためである。(7)

バアル礼拝に心を寄せるイスラエルの民衆は、バアル神によってもたらされた収穫を喜び
祝う祭りを行うために集まっていました。

預言者ホセアはその人々に向かつて神の裁きをストレートに告げました。「刑罰の日は
来た。報いの日は来た」。豊かな収穫を喜び祝う祭りをぶち壊すようなホセアの言葉は、
民衆の激しい反感を買い、人々はホセアに向かつて「愚か者、狂人！」という怒号を浴びせ
ました。自分の語る言葉が人々から受け入れられず、かえって愚か者呼ばわりされたな
ら、たとえ預言者であつても失意を感じることでしょう。それでもなおホセアは自分の姿勢
を曲げることはありませんでした。「預言者はわが神の民エフライムの見張人である」(8)。
国家が滅亡へと向かつているのを知らされている預言者は、たとえ人々の激しい反感を買
おうとも、くじけることなく語り続けなければならぬと意を強くしました。人々の耳に
心地よく響く言葉を語ることが、愛国心の表れではありません。真実に自らの国を愛する
からこそ、国家の偽善を鋭く指摘し、悔い改めを厳しく迫つたのです。

この国に生きているわたしたちは、たとえ人々から愚か者のように見られようとも、真
実に国を愛するゆえに、見張り人としての使命を果たしていきたいと願います。

半焼けの菓子

ホセア書7章

エフライムはもろもろの民の中に入り混じる。エフライムは火にかけて、かえさ
ない菓子である。他国人らは彼の力を食い尽すが、彼はそれを知らない。(8、9)

神に背き続けるイスラエルの民に対する神の嘆きの言葉が続いています。彼らは偶像の
神々を慕つて真の神からどんどんと離れていったのです。

そのような民の姿が「エフライムは火にかけて、かえさない菓子である」と表現されていま
す。「エフライム」とは北王国イスラエルのことで、「かえさない菓子」は新改訳では「生焼けの
パン菓子」となっています。焼き菓子を作るとき、片面が焼けたらひっくり返して裏面を焼
くものです。ところがイスラエルの民は裏返すことなく半分しか火の通っていない生焼け状
態になつていて指摘されています。これは片面は宗教的で、もう片面は世俗的になつてい
る状態を指しています。彼らの態度には表と裏があつて、真の神を信じているように見せか
けながら、もう一方ではこの世の神々に心を寄せているのです。しかも、当の本人たちは自
分の霊的に衰えた状態に気づいていないのです。これはわたしたちも同じように陥り
やすい姿ではないでしょうか。信仰的な側面と非常にこの世的な側面とが同居し、自分で
その霊性が衰えかけていることに気づかないために平気です。

わたしたちは常に神の言葉によつて自らの本当の姿を映し出していただき、わたしたち
の存在全体に聖霊の火が通るように祈り求めようではありませんか。

神を捨てた偽りの民

ホセア書8章

わたしは多くの戒めを書き与えた。しかし、彼らはそれを無縁のものとなしなした。(12／新共同訳)

北王国イスラエルは表面的には神を礼拝しているように見えながら、実際にはその信仰は内実を失った形ばかりのものとなっていました。にもかかわらず、彼らは自分たちの罪を認めず、神に向かつて偽りの信仰を表明していました。

これに対して主は彼らの虚偽を指摘し、彼らに神の裁きが臨むことを告げられます。「彼らは犠牲を好み、肉をささげてこれを食べる。しかし主はこれを喜ばれない。今、彼らの不義を覚え、彼らの罪を罰せられる」。彼らの信仰の脱線の原因の一つは、神の言葉を喜ばず、それを「無縁のもの」と見なしたところにあります。新改訳では「彼らはこれを他国人のもののようにみなす」とあります。自分たちに向けて語られている神の言葉を、自分たちとは関係のないもの、他国人のものに見なして無視していたということです。神の言葉によって生かされ、生きるべき道が定められるはずの神の民が、自ら神の言葉を捨てたのです。これでは神の民としての命を失って当然のことでした。

この民の姿は、わたしたちにとって反面教師です。神の言葉によって生きるべきキリスト者が、神の語りかけを無縁のものに見なしたなら、どうして信仰の命を保つことができるでしょう。神の言葉に耳を傾け、神にしっかりとつながるわたしたちでありたいと願います。

主による正しい裁き

詩篇140篇

わたしは主が苦しむ者の訴えをたすけ、貧しい者のために正しい裁きを行われることを知っています。(12)

詩人は敵対する者たちによってひどく苦しめられています。それは武力による攻撃ではなく、あざけり、中傷といった言葉による暴力でした。

詩人は主に向かつて助けを祈り求めます。その祈りは二つに分けられます。一つは「悪しき人々からわたしを助け出し」(1)という祈りです。主イエスご自身も、「主の祈り」の中でそのように祈るようにと教えられました(マタイ六13)。もう一つの祈りは、「乱暴な人をすみやかに災に追い捕えさせてください」(11)とあるように、悪しき者たちに災いが下るようという願いです。わたしたちがこれを讀むと、いくら悪人であっても、災いが臨むように祈るのは信仰者らしくないと思うかもしれません。ただこれは、自分の欲望を満足させるための祈りではなく、神がこの地上に正しい裁きを行ってくださり、不義なる者たちが退けられることよって義なる神のご支配が全ての人々の目に明らかになるようにという願いです。主が正しい裁きを行ってくださることが、神を信じる者たちにとって救いとなるのです。

わたしたちの時代にあつても、不義なる者たちが小さき者たちを苦しめるようなことが行われています。神はなぜ黙っておられるのだろうかという思いを持つことがあるでしょう。けれども主は必ず正しい裁きを行ってくださると信じて、祈ろうではありませんか。

滅びの宣告

ホセア書13章

イスラエルよ、わたしはあなたを滅ぼす。だがあなたを助けることができよう。(9)

ホセアがこれまで語ってきたとおり、北王国イスラエルの滅亡の時が近づき、アツスリヤの王によるサマリヤ包囲が始まったときに、これらの言葉が語られたと思われれます。

ホセアはここで主による宣言を語ります。「イスラエルよ、わたしはあなたを滅ぼす。だがあなたを助けることができよう」。主はこれまで幾度もイスラエルの民を赦し、彼らを滅ぼすのをとどめてこられました。けれども民は主の恵みを忘れ、主を捨てて他の神々を慕い続けました。「その心が高ぶり、わたしを忘れた」(6)と。それゆえ神はついに、民に対する態度を変え、彼らを滅ぼすことを決意されました。人々は自分たちの国の命運が自分たちの神に対する信仰にかかっているとは考えていませんでした。預言者たちがどんなに熱心に悔い改めを勧めても、今の自分たちの生活には関係ないとして真剣に耳を傾けることをしなかつたのです。悲しいことに、彼らは自分たちの滅びを通して、主こそ真の神であることを知らされることになるのです。主の恵みと憐れみを軽んじ、主を捨て続けて生きるとき、主もついにその民を捨てることを決断されるのです。

主はわたしたちにも語られます。あなたがたがどうして滅んでよかろう。背ける者たちよ、わたしのもとに帰りなさいと。招いてくださる主のもとに帰ろうではありませんか。

新田を耕せ

ホセア書10章

あなたがたは自分のために正義をまき、いつくしみの実を刈り取り、あなたがたの新田を耕せ。今は主を求むべき時である。主は来て救いを雨のように、あなたがたに降りそそがれる。(12)

民の罪に対する神の裁きを語るホセアですが、そのただ中で突然神の恵みを語ります。主によつて捨てられようとしているイスラエルにも、回復の望みが残されているというのです。これまでイスラエルのしてきたことは、罪の種をまき、不正と偽りの実を刈り取ることでした。そのような民に対して、「あなたがたの新田を耕せ」とホセアは命じます。悪しき実を結んだ木々の根を掘り起こし、固くなっている大地を耕して主の恵みを受け止められるように柔らかくせよというのです。主はこのような頑なな民を見捨てることなく、「主は来て救いを雨のように、あなたがたに降りそそがれる」からです。主の慈しみと憐れみが残されている今こそ、心を変えて主を求めるように民に訴えます。「今は主を求むべき時である」と。主の恵みを求めることにおいて、「やがてそのうち」という態度はふさわしくありません。信仰は常に、今どこでどのように生きるかが焦点となります。使徒パウロも同じように語っています。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」(第二コリント六2)。

わたしたちの信仰生活において、開墾されずに残っている恵みの領域がまだ多くあるのではないのでしょうか。主はわたしたちに語られます。「あなたがたの新田を耕せ」と。今こそ主を求めるべき時だからです。この恵みの時を先送りしてはなりません。

捨てることのできない神

ホセア書11章

エフライムよ、どうして、あなたを捨てることができようか。イスラエルよ、どうしてあなたを渡すことができようか。……わたしのあわれみは、ことごとくもえ起っている。(8)

神とイスラエルの民との関係を夫婦の愛にたとえて語つてきましたが、ここでは子どもにも対する親の愛にたとえて語つています。

親が子を愛するように、主なる神はイスラエルの民がどのように背こうとも、彼らに対する愛は変わらないのです。神に背き続けるイスラエルの民は、神の義からみれば捨てられて当然の状態でした。「エフライムよ、どうして、あなたを捨てることができようか」という主の叫びは、主の内面的な葛藤を表しています。捨てられて当然のイスラエルの民を主は決して捨てることなどできないのです。ここに出てくる「アデマ」や「ゼボイム」とは、ソドムとゴモラと一緒に神の裁きを受けて焼き滅ぼされた町の名前です。イスラエルの罪はそれらの町と同じように深いけれども、彼らを愛する主の思いはいよいよ激しく燃えているのです。わたしたちは自らの罪深さに絶望し、「こんなわたしを神がどうして赦してくださるだろうか」と思つてしまうことがあります。けれども主は、同じ「どうして」を使いながらも、「どうして、あなたを捨てることができようか」と言われるのです。

わたしたちは自らの罪深さに打ちひしがれてしまうときも、わたしたちを決して捨てることのない神の憐れみを信じて、主の赦しを祈り求めようではありませんか。

神の祝福を求める熱心さ

ホセア書12章

ヤコブは胎にいたとき、その兄弟のかかとを捕え、成人したとき神と争った。彼は天の使と争つて勝ち、泣いてこれにあわれみを求めた。彼はベテルで神に出会い、その所で神は彼と語られた。(3、4)

神に背くイスラエルの民に対する警告が続けて語られる中で、彼らの先祖ヤコブの物語を取り上げて戒めを語ります。

ヤコブという名は「押しつける者」という意味で、彼はその名のとおり、父と兄をだまして長子の権を奪い取りました。多くの弱さ、醜さを見せたヤコブでしたが、彼の長所は、神の祝福を貪欲に追い求める姿勢でした。彼はヤボクの渡しにおいては神の使いと争い、「わたしを祝福してくださいさらないなら、あなたを去らせません」(創世記三二・26)とすがりつきました。そしてついに、神の祝福を得たのです。イスラエルという名は、主がそのときにヤコブに与えてくださった名前でした。それゆえイスラエルの民は、神の祝福を熱心に追い求めるヤコブのこの姿勢を受け継ぐべき者たちでした。ところが、彼らは主の祝福よりもバアルの神の祝福を慕い求めたのです。主は今ヤコブの物語を引き合いに出しながら、「あなたはあなたに神に帰り、いつくしみと正しきとを守り、つねにあなたの神を待ち望め」(6)と勧めました。神は常に、熱心に祝福を求める者たちに豊かな恵みを注いでくださるお方なのです。新しいイスラエルとしての教会は、ヤコブのこの姿勢にならう者たちです。わたしたちも神にしがみつくようにして、その祝福を追い求めようではありませんか。

1. 「礼拝に生きる神の民」の標語のもと、礼拝によって生かされる教会であるように
2. 定期集会の祝福のために
 - ・礼 拝 (日・午前 10:30) インターネットをとおしても、私たちが真実な礼拝をささげ続けることができるように
 - ・祈 禱 会 (水・午後 7:30) Zoom を用いての祈禱会のために
 - ・木曜祈禱会 (木・午前 10:30) YouTube のライブ配信のために
3. 私たちの目ざす教会ー「キリストがあらわされる教会」が実現していくように
 - ① (礼 拝) 『イエスは主』と告白する教会
 - ② (宣 教) 「キリストの香りを放つ教会」
 - ③ (交わり) 「主を中心とした交わりに生きる教会」
4. 長期間にわたる会堂借入金の返済のために
 - ・教会債 (毎年 2 月、10 年間)
5. 教会学校の祝福のために
 - ・Zoom を用いての C S が守られるように
 - ・子どもたちに信仰が確実に継承されていくように
6. 救われる方が起こされるように
 - ・家族、親族、友人の救いのため、求道中の方々の救いのために
7. 病気や弱さを覚えている方々の回復のために
 - ・工藤絢子姉 (入院)、伊藤姉、齋藤美子姉、山本姉、横道兄、齋藤兄、そのほかの方々のため
 - ・大前信夫師のために
8. 新型コロナウイルスの世界的な感染が早く収束するように。
 - ・礼拝のライブ配信の働きが守られ、用いられるように
 - ・教会の皆さんが感染から守られますように
 - ・医療従事者をはじめ、対応に当たっている方々の働きのために
9. 東北教区の諸教会のために (弘前、三沢、築館、福島、宮古)
 - ・10/9 (日) の教区クリスチャンミーティングの祝福のために
10. ロシアによるウクライナ侵攻が停止・解決するように

絶えることのない神の愛

ホセア書 14 章

わたしは彼らのそむきをいやし、喜んでこれを愛する。わたしの怒りは彼らを離れ去ったからである。(4)

このホセアの言葉は、イスラエルの滅びが決定的となった時に語られたものです。このような事態に至っては、もはやどこにも望みを見いだせなくなつたように思われました。

ところがホセアは、今この時にこそ回復の約束を語りました。ホセアはまず悔い改めを勧めます。「イスラエルよ、あなたの神、主に帰れ」(1)。4節以下は、主なる神がイスラエルの民に与えてくださる回復の恵みが語られています。「わたしは彼らのそむきをいやし、喜んでこれを愛する」。ここに「喜んで」とあるのは、イスラエルの民が悔い改めるので、それと引き換えに愛してあげる、というようなものではないということです。民の悔い改めに先立つて、民に対する神の愛は抑えられないほどにほとばしり出る様子を表しています。神は神の民を愛することをやめることが出来ないお方なのです。神がこのような愛のお方であることが分かるからこそ、わたしたちはたとえどのような状態に陥つたとしても、神のもとに帰ることができます。こんなわたしたちなど神も愛してくださらないに違いない、というこだわりを捨てて、赦しの神のもとにありのままの自分の姿を差し出すことができます。

いやいやではなく、喜んでわたしたちを愛してくださる主に対して、わたしたちの顔を真っ直ぐに神に向けようではありませんか。それが悔い改めるといふことです。

正しい者が愛情をもって私を打ち、私を責めますように。それは頭にそそがれる油です。私の頭がそれを拒まないようにしてください。(5/新改訳)

窮地にある詩人が神の助けを求めて叫んでいます。悪者たちが詩人を罪の中へと誘っているため、その誘惑から守られるようにと求めているのです。

詩人はここで、自分が守られることだけを求めているわけではありません。正しい人々が本人のためを思つて語ってくれる戒めの言葉を素直な心で受け止めることができずようにと祈ります。わたしたちは他の人から責められるようなとき、たといそれが射た批判であつたとしても、感情的に受け入れられず、せつかくの忠告を拒絶してしまうことがあります。それによつてせつかくの成長のチャンス逃してしまいます。主なる神はそのような隣人の言葉を通してわたしたちをあえてむち打ち、さらなる祝福を与えようと願つておられます。それゆえ詩人は、「私の頭がそれを拒まないようにしてください」と祈ります。へりくだりの心をもつて、隣人の忠告を受け入れられるようにということです。「わたしの子よ、主の訓練を軽んじてはいけない。主に責められるとき、弱り果ててはならない。主は愛する者を訓練し、受けいれるすべての子を、むち打たれるのである」(ヘブル一25、6)。

愛による主の訓練をへりくだりをもつて受け止めるわたしたちでありたいと願います。わたしたちの成長・成熟を願うからこそ、主はわたしたちを打たれるのです。

主の日の到来の予告

ヨエル書1章

ああ、その日はわざわいだ。主の日は近く、全能者からの滅びのように来るからである。(15)

ヨエルによつて告げられたこの預言の言葉は、「主の日」が主題とされていることから、ユダ王国の滅亡を前にして、民に悔い改めを迫るために語られた言葉だと思われれます。

ここにはかつてなかつたほどのいなごの大軍によつて、あらゆる作物が食い尽くされ、地が完全に荒廃し、飢饉が人々を苦しめる様子が描かれています。このような未曾有の大災害にあたり、ヨエルは「泣き悲しめ」(8)と叫びます。民衆はヨエルに促されなくても、この大災害のゆえに嘆き悲しんでいます。けれどもヨエルが人々の注意を喚起したのはいなごの災害に対してではなく、迫り来る「主の日」に対してでした。いなごによる大災害は、それよりもはるかに恐ろしい「主の日」が近づいていることの予兆であるとヨエルは理解したのです。人々は目の前の災害に対しては嘆いても、その目を「主の日」に向けることはありませんでした。それゆえヨエルは人々に向かって主による決定的な審きの日に対してこそ心を向け、その日に備えるべきことを告げたのです。

ヨエルの言葉は今のわたしたちにも語られています。世界で起こる様々な災害を目にするとき、迫りつつある「主の日」に対してこそ備えなければなりません。「万物の終りが近づいている。だから、心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(第一ペテロ四7)。